



音が ひらく、 未来。

教会の鐘や出港する船の汽笛、
路面電車のガタンゴトンという音。
円形劇場に例えられるすり鉢状をした
長崎の街にはさまざまな音が響き渡り、
長崎特有の音風景を創り出しています。
そもそも「音」は、物体の振動によって生じる
空気などの揺らぎのこと。
その中には私たちの耳に聞こえる音だけでなく、
超音波や超低周波音なども含まれます。
水産、医療、工学、情報科学などの
幅広い分野で活用されている音には、
どのような力が秘められているのでしょうか。
最新の研究とともにご紹介します。

魚の鳴き声に秘められた 繁殖行動のメカニズム

鳴き声の録音には水中マイクや防水デジタルカメラ、GoProカメラなど、一般的に手に入りやすい機器を使用しています。研究コストを抑えられる点でも有効です。



海洋未来イノベーション機構 天谷 貴史 助教

音(鳴き声)を出す魚は、現在判明しているものだけでなんと約1000種。一般的には知られていませんが、専門家の間では知られている現象です。魚は、人のように口や声帯から声を出しておらず、鰾や音を出すための筋肉(発音筋)を使って音を出しています。魚の生態を研究している天谷助教は、長崎でも水揚げされる高級魚の一つ「メバル」の求愛行動に、オスの“尿”と“鳴き声”が関係していることを、世界で初めて明らかにしました。奇想天外なこの行動には、どのような意味や目的があるのでしょうか。

「オスがメスに求愛する時、メスの鼻先で尿を放出します。この行動に関する実証実験を行う中で、オスが事前に鳴き声を発することが判明しました。まず、鳴き声を出し、大丈夫だと確認ができたら尿を放出する。つまり鳴き声には、

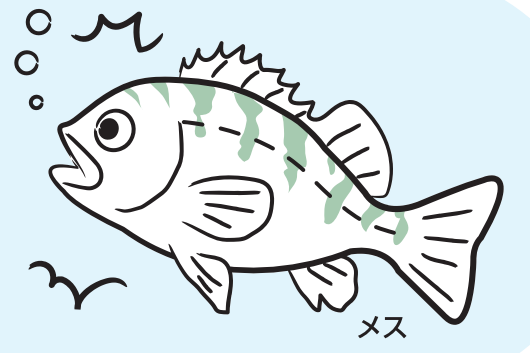
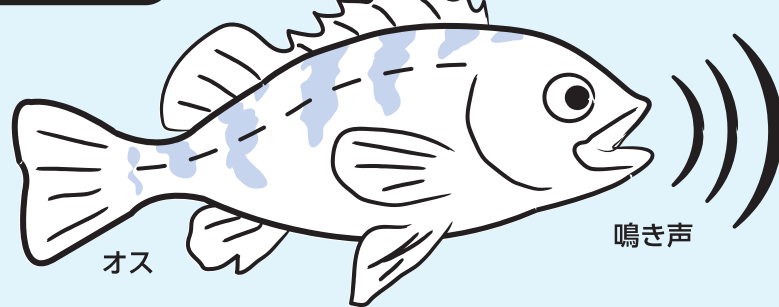
メスが驚いて逃げてしまわないよう、事前にアピールをする目的があるのです」。

天谷助教はメバルのほかに、ハタ類の求愛行動に関する研究も進めています。「ハタは求愛行動や縄張り争いの際に音を発することがあります。求愛時はどのような音を出すのか、オス同士がけんかする時に出す音とは異なるのか、産卵場に水中マイクをセットして

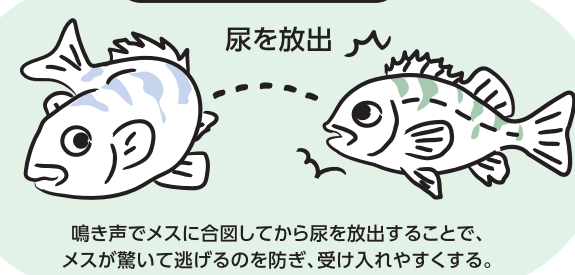
調べています」。

こうした研究は魚の生態解明だけでなく、社会課題の解決にも貢献する可能性があります。例えば、養殖業界で深刻化している人材不足において、鳴き声の研究が課題解決につながるのではないかと天谷助教は考えています。「養殖現場では魚の産卵時期など、熟練のスタッフが経験をもとに見極めるケースが少なくありません。養殖場では

① 鳴き声でアピール



② 尿を放出し誘引



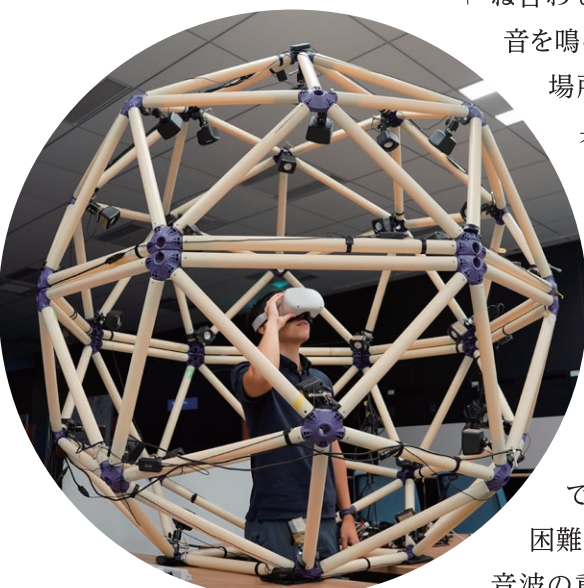
超音波が炎症を抑えるのはなぜか。研究室に在籍している大学院生が実験に何度もトライしてくれた結果、メカニズムを解明することができました。



進化し続ける音響技術 感動を高める音体験を目指して

情報データ科学部 堤 公孝 准教授

堤准教授の研究室を訪ねると、一直線に並んだ32台のスピーカーが迎えてくれました。モニターに表示された犬や鳥の鳴き声が、スピーカーから再生されると、音がすぐ目の前で聞こえたか



球体の実験装置は、幼児用のジャングルジムを転用して自作。VRヘッドセットを付けた状態で、球体の中央に立つことで、360度の映像と音が再現でき、現実に近い没入感を体験できる実験に取り組んでいます。

と思えば、次の瞬間には遠くへ移動したかのように感じられます。この奥行きのある音空間を生み出しているのが「スピーカーアレイ」と呼ばれる装置です。複数のスピーカーから出る音を重ね合わせることで、リスナーの耳元で音を鳴らすなど、実際には存在しない場所に音源があるかのような効果を作り出します。

「近年、映画館を中心に“IMAX”などの立体音響システムが普及してきました。これらは主に音量を制御することで音源の位置を動かすサラウンド技術をベースとしています。サラウンドでは奥行き方向の音源移動が困難です。一方、我々の研究室では、音波の重ね合わせを利用した立体音響技術を研究しています。複数のスピーカーから出る音波を精密に制御することで、耳元で音が鳴っているように感じさせるなど、仮想的な音源を出現

させることができます。これは単に音量を変えているのではなく、空間内の音波そのものを制御して実現しています」。

通常、1台のスピーカーから出た音はそのまま周囲へ広がります。しかし、複数のスピーカーを用いると、ある場所では音波同士が重なって強くなり、別の場所では音波同士が打ち消し合って弱くなるという現象が起きます。堤研究室では、この性質を利用して、各スピーカーの音の強さや再生のタイミングを精密に調整し、空間全体の音の分布を自在に操っているのです。

現在、堤研究室ではさらに高精度な空間音響の再現を目指した研究を進めています。

「例えば、コンサートホールの映像に対して、オーケストラの演奏を会場特有の豊かな響きとともに再現するといったように、立体映像に合わせて立体音響を合成する技術の実現を目指しています」。この研究の応用範囲は

大規模なスピーカーシステムによって、音が空間に浮き上がる現象は感動的です。音響研究の面白さでもあるでしょう。



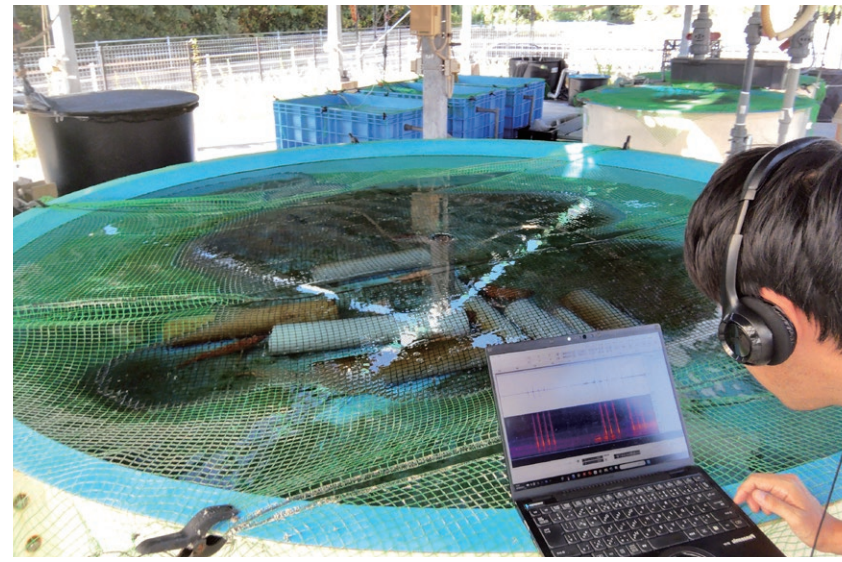
エンターテインメントにとどまりません。「スピーカーアレイの考え方はソナー技術にも応用できます。魚群探知機の性能向上や魚種判別への応用の可能性があり、水産学部の先生方とも議論を進めています」。

音波を自在に操る立体音響技術は、さまざまな分野への展開も期待されています。



32台のスピーカーを並べた実験風景。コントローラーを操作することで、犬や鳥の鳴き声が目の前から背後へ移動するなど、音が空間内で移動する体験ができます。「実験は、理論的な難しさと装置を組む難しさがあります。スピーカーの数が増えてくると、市販の機材では対応できなくなることもあるため、専用の機材を自分たちで取り付けることもあるんですよ」と堤准教授。

ハタを対象に飼育水槽で行われた音響モニタリングの様子。



水温や明るさ、与えるエサの種類や回数などを人間が管理しています。また、魚が季節を感知するタイミングには個体差があるため、産卵を促すホルモン

の投入時期など、長年魚を扱ってきたベテランの経験に頼らざるを得ません。魚を生簀から取り出して調べる方法もありますが、人手がかかりますし魚に与えるダメージも大きいのです。例えば、水中マイクを用いて魚が発する音を検知し、産卵時期を見極めら

れるようになれば、このような課題の解決にもつながるでしょう。将来的には、人の経験や勘を補完するソフトやアプリの開発に発展させたいですね」。

農業や畜産業と比べて難易度が高いとされる水産業のスマート化。魚が発する“音”をヒントにした新技術の開発が待たれます。

生態を知る音



脳と内臓をつなぐ迷走神経 超音波が活性化を促す

医学部 井上 剛 教授

妊婦検診やがん検診など体内を画像化する「超音波エコー」として、医療現場で広く利用されている超音波技術。井上教授は2015年、かつての留学先で超音波によって体内の炎症を抑えられることを発見しました。この発見は新たな治療法の開発につながる可能性を秘めていましたが、当時の技術では超音波がどのように作用してそのような現象が起こるのか、解明できなかったそうです。

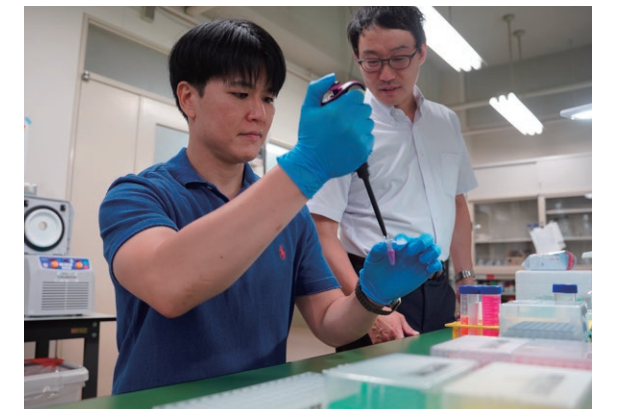
現在、井上教授の研究室は、工学部の古里友宏准教授との共同研究によって、その謎を解き明かそうとしています。マウスを使った実証実験を行い、腹部に超音波を当てることで、体の炎症を抑え

る神経回路である「迷走神経」が活性化される可能性があることが示されたのです。では、迷走神経は体内でどのような働きをするのでしょうか。井上教授にお話を聞きました。

「“脳と内臓をつなぐ”と言われる迷走神経は、自律神経の一つである副交感神経の中心的な役割を担っています。具体的には食後に腸を動かしたり、病気の時に体内の炎症を抑えたり、体の状態を調整する働きをすることが分かっています。従来、迷走神経の刺激に関する研究では、主に電気刺激装置が用いられてきましたが、超音波を利用することによって、より簡単に体への負担が少ない方法を実現できると考えました」。

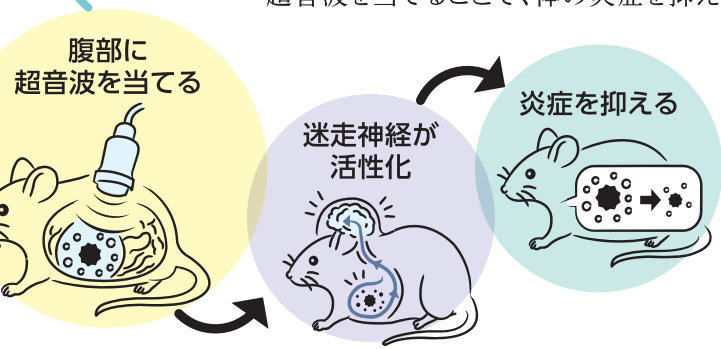
実験の結果、超音波がマウスの腹部の神経を刺激し、その情報が迷走神経を通じて脳に伝わるのが分かりました。さらに、脳からの指令が細菌やウイルスなどの病原体から体を守る免疫系へ働きかけ、炎症を抑えるという一連の仕組みが解明されました。炎症は多くの病気

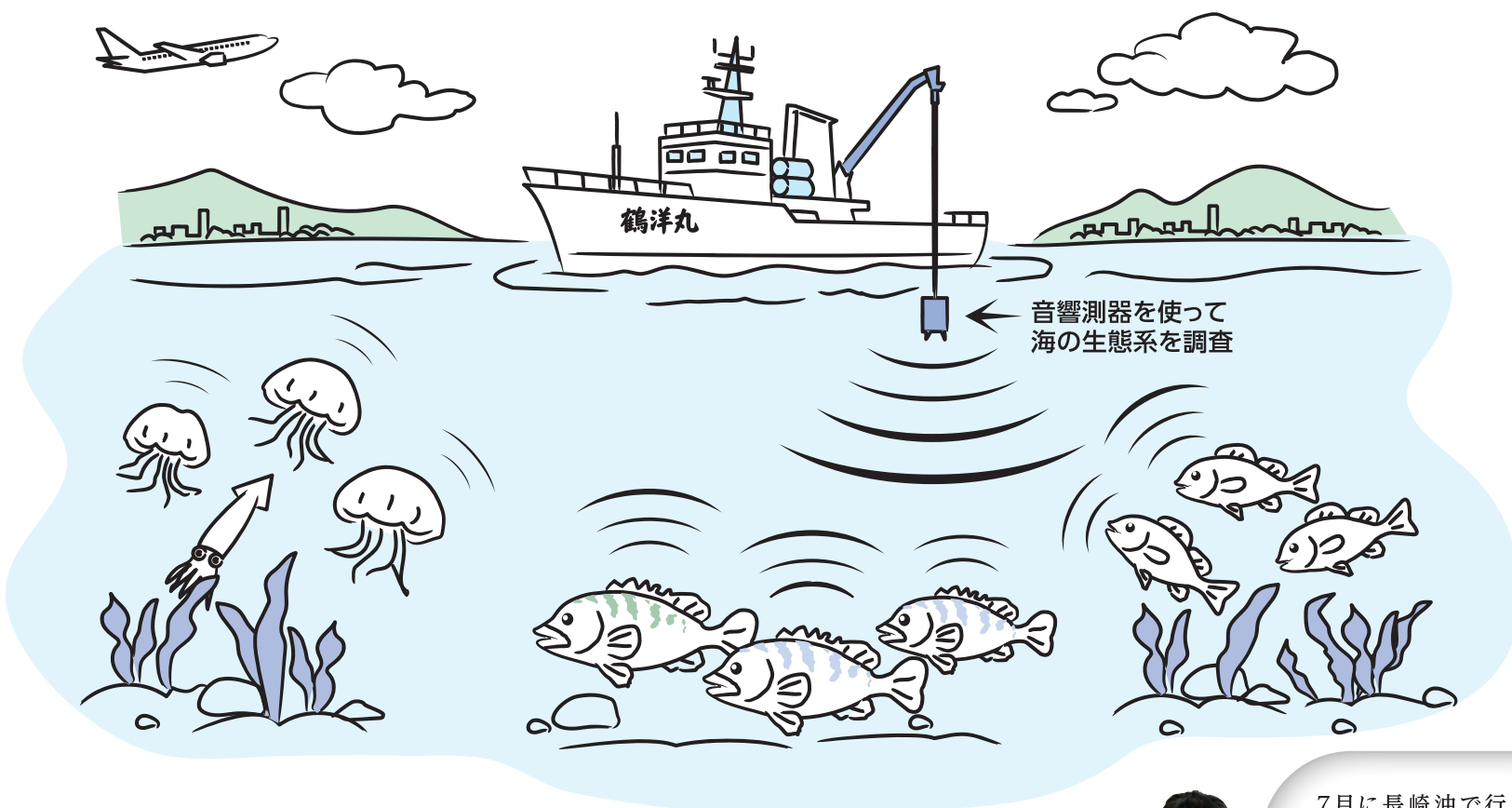
において関与するため、さまざまな疾患に応用できると井上教授は考えています。「ただし、現在は動物実験の段階であり、人体においても同様の効果が得られるかはまだ分かっていません。リウマチやクローン病(腸の炎症性疾患)など、炎症系の疾患で苦しんでいる方々はい多く、副作用の強い薬に頼らず、超音波で治療できるよう研究を進めていきたいと考えています」と井上教授。将来的には、家庭でも利用できる超音波治療器への応用などを目指しています。



井上教授とともに粘り強く実験に取り組んだ、大学院医歯薬学総合研究科の下山皓太郎さん(手前)。

身体を整える音





魚種が豊富な長崎の海 音波の力で生態系を探る

水産学部 広瀬 美由紀 准教授

音が水中を伝わる速度は、空気中の約4倍。しかも、水中ではすぐに届かなくなる光や電波と違い、音は遠くまで伝わります。この性質を応用しているのが、漁業の現場などで広く普及している魚群探知機やソナー。水中に送信した音波が物体に当たって戻ってくる“反射波（エコー）”で、生物の位置や量を調べる装置です。広瀬准教授の研究室ではこれらの装置（音響測器）を使って、海の生態系に関する研究を行っています。広瀬准教授のお話です。

「例えば、クラゲは魚に比べて跳ね返

す音が弱いのですが、これは多くの魚が鰾という気体の袋を持つ一方で、クラゲにはこうした器官がなく、体の性質も海水に近いからです。そこで私たちは、調べたい生物がどのくらい音を跳ね返すのか、どの音の高さ（周波数）だとより強く跳ね返すのかといった基礎データを集めています。これらのデータを活用し、魚種の分布変化を調べることで温暖化や洋上風力発電の設置などによる環境変化が生態系に及ぼす影響の評価にも取り組んでいます。長崎は魚種が豊富なため、魚種ごとのデータを多く蓄積できます。それも長崎の海の魅力の一つです」。

中でも力を入れている環境評価が大村湾での調査です。大村湾は、海水が入れ替わりにくく、毎年夏に海底付近で“貧酸素水塊”が発生する海域。その実態と生物への影響を調べています。

「貧酸素水塊とは、海水に溶けている酸素が、生物がすみにくくなるほど少なくなった水のかたまりです。大村湾の海底では、ひどい場所では酸素がほぼゼロ近くまで下がります。魚は貧酸素水塊を避けると考えられますが、実際はどうかを、最新の魚群探知機や音響カメラ（暗く濁った水中でも撮影可能な音を使ったカメラ）を使用して調査しています。これまでの調査では、どのくらい酸素が少なくなると魚がいなくなるのか、その値が調査した年によって異なる

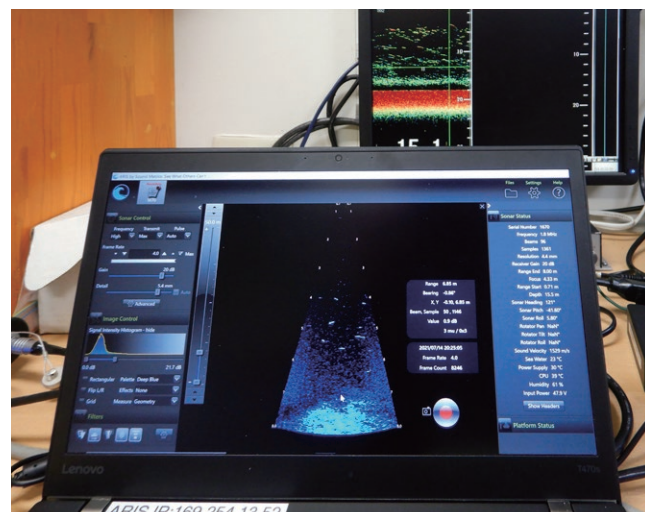
ことがわかってきました。また、貧酸素水塊を出入りする魚もいて、ただ避けているだけではないようです」。

音響測器を使った研究が盛んに行われてきたのは、北欧や北米など魚の種類が少なく、種の判別が比較的容易な高緯度海域です。そのため、従来の魚群探知機では、生物の位置や量を把握できても、種類まで見分けるのは簡単ではなく、長崎のように魚の種類が多い海での活用は難易度が高いといえます。そこで生きてくるのが、広瀬准教授が長崎周辺海域で収集した種ごとのデータです。「地道に収集したデータは、種を見分ける技術の向上につながります。種の判別が容易になれば、これまでは評価が難しかった海域でも、環境変化が生態系に与える影響を捉えられるようになって考えています」。広瀬准教授が積み重ねてきたデータは、音響測器を「魚を探す道具」から「海の環境を測る道具」へと広げようとしています。

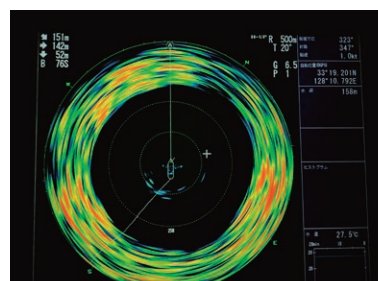


オープンキャンパスでは、研究に使用している最新の音響カメラを実演。水産学部棟前の池の様子を観察しました。

海を探る
音



音響カメラと魚群探知機



周囲の魚探索ソナー

声なき声に耳を傾け インフラの安全を守る

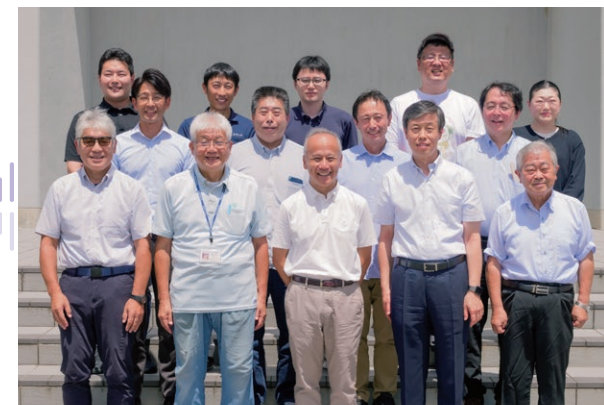
工学部 西川 貴文 教授

地震や台風などの自然災害が多い日本。高度経済成長期に多くの橋が架けられましたが、当時は約50年間の使用を想定して設計されました。現在、それらの橋の老朽化が進み、適切な維持管理の重要性が高まる中、既存の点検手法に加えて、限られた人員と予算で社会インフラを支えることができる技術の開発と導入が求められています。本学で、橋や道路の維持管理技術に関する研究に取り組む西川教授に、「音」を切り口に代表的な点検手法と最新技術について話を伺いました。

「離島や半島が多い長崎県には、1万を超える橋が架けられており、自治体が策定した独自の維持管理計画の下で対策が徹底されてきました。点検時には、外観から内部の状態を確認することが難しい構造物を、壊すことなく検査する方法が用いられています。代表

的な手法の一つが、金属部材や接合部、コンクリートの表面を点検用のハンマーでたたく“打音検査”です。返ってくる音の高さや響き方の違いから、ゆるみやひび割れ、内部の空洞などの異常を見つけます。また、人には聞こえない高い周波数の超音波を構造内部に伝え、跳ね返ってきた波を分析する“超音波探傷試験”も、代表的な非破壊検査技術です。内部の亀裂や溶接部の内部にある微細なひび割れなどの異常の検知に用いられています」。

さらに、近年は点検の高度化や効率化（＝時間と労力の軽減）につながる新技術が注目されていると西川教授は話します。「研究室では、橋の振動から構造物の目には見えない特徴と状態を把握する“構造同定”の研究を行っています。橋に設置したセンサーで振動を計測し、そのデータを分析することで、異



本学が長崎県と連携して実施している「道守養成講座（以下、道守）」は、道路インフラに関わる民間技術者や自治体職員に加えて、身近なインフラの異常を早期に発見できるように一般市民も受講できる講座。地域社会と連携を深めながら、研究と人材育成の両面からインフラの維持管理に貢献しています。写真は、講座を担当する講師陣（工学部の教職員）。

道守養成講座
詳細はこちら



十八親和ホール・長崎創楽堂

広く開かれた音楽ホール
音楽が伝える真の豊かさへ

創楽堂は、文教キャンパスの一角に2012年春に誕生した音楽ホールです。これまで学内のみならず、市民に開かれたホールとして活用されてきました。2025年には、十八親和銀行がネーミングライツ（命名権）を取得。「十八親和ホール・長崎創楽堂」に名称が変わり、これを機に大学と銀行による芸術文化普及の共創事業もスタート。約80人の経営者や学生などが参加したキックオフイベントでは、学長と頭取による対談やミニコンサートなどが行われました。ほかにも、国内外の著名アーティ

ストによる特別演奏会や、学内の教員と地域のアーティストが連携したコンサート、子ども向けのワークショップなど、大学主催の多彩なイベントが開催されています。教育学部の加納教授に創楽堂の魅力を伺いました。

「創楽堂は、音がよりきれいに響くように、反響板（音響効果を高める板）を壁に使用しています。また、演奏者と観客の距離がとても近く、音楽を身近なものとして体感していたと思います。大学の中にある施設として、若い人を育てていく役割もあるでしょう。音楽を通して人と人



が学び合う、そして共感し合う。そこから感動が生まれれば、私たちの感性がより豊かになりますし、その力が還元されれば社会全体のエネルギーにもなるはずです。創楽堂はそういった役割を担う場所だと思います。引き続き創楽堂では、さまざまなイベントを予定。また、サークル発表やコンサートなど、市民の皆さんの利用も可能です（有料）。

今後は、本学が協定を結んでいる海外の大学との交流イベントも予定しています。



加納 暁子 教授
教育学部

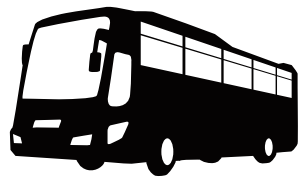
インフラの安全性を維持するためには、管理者である自治体による綿密な整備計画が重要ですが、その策定に当たっては、私たちが提供するエビデンスが活用されています。

社会を守る
音

Saiyu Fund

「西遊基金」

2026年4月・6月 開催



長崎の魅力を知り、未来を拓く ～NAGASAKIクエスト～



(株)A and Live

代表取締役
高田 明氏

学生たちが“長崎の魅力”を探しに出発！
体験バスツアー「NAGASAKIクエスト」を開催しました。

2026年4月と6月、本学の学生を対象に「核廃絶・平和」「長崎の産業革命遺産」「潜伏キリシタン」の3つのコースに分かれて県内各地を訪問するバスツアーを開催しました。学部や学年、国籍を越えた交流も行われ、多様な視点から長崎の歴史や文化、産業、地域の特色について考える機会となりました。

参加した学生からは、「専門ガイドの解説が分かりやすく、当時の状況をリアルに想像することができました」「他学部の学生や留学生と交流する機会になり、さまざまな視点から意見を聞くことができました」といった声が寄せられました。こうした機会を提供しているのが、地域体験型プログラム「NAGASAKIクエスト～長崎魅力共創プロジェクト～」です。本プログラムは、「長生だからこそ、長崎の歴史と文化をもっと知ってほしい」という思いの下、長崎が世界に誇る歴史・文化・産業の魅力を実際に体験。その価値を理解するとともに発信できる人材の育成を目的として開催されています。株式会社A and Live代表取締役の高田明氏からのご寄附を原資として実施しており、福砂屋や蘇州林など地場企業の協賛も受けながら運営されています。地域の皆さまの支えにより、学生たちは長崎の魅力を見て学ぶ貴重な機会を得ています。

ツアーに参加した学生たちは、7月11日に開催された成果報告会に参加しました。多数の学生がエントリーした中、事前審査を通過した9組のチームが、学長や理事、高田明氏ら審査員の前に発表を行いました。潜伏キリシタンの歴史を体験的に伝える観光企画や、SNSを活用した産業遺産のデジタルアーカイブ構築、原爆の記憶を継承する新たな平和学習の提案など、長崎の魅力発信や地域活性化に向けたアイデアが提案されました。

今後も本学では、地域と連携しながら、学生が長崎の魅力を学び発信する機会を提供してまいります。



7月11日に開催された成果報告会



核廃絶・平和コース



長崎の産業革命遺産コース



潜伏キリシタンコース

協賛各社

福砂屋

400年以上にわたり長崎の地で事業を続けてきた私たちにとって、この地域に息づく歴史や文化、人々の営みは、長崎ならではの価値だと感じています。NAGASAKIクエストは、学生の皆さんが実際に地域を訪れ、その背景にある歴史や文化に触れながら学びを深めることのできる貴重な機会だと思います。

長崎には、次の世代へ受け継いでいきたい文化や伝統、人と人とのつながりがあります。本プログラムを通じて、学生の皆さんが長崎への理解を深め、それぞれの視点で地域の魅力を見つめ直すきっかけとなることを期待しています。



蘇州林

長崎は古くから海外との交流によって発展し、多様な文化を受け入れながら独自の個性を育んできた街です。私たち蘇州林も、その歴史とともに歩みを重ねてきました。NAGASAKIクエストは、学生の皆さんが地域を訪れ、長崎の歴史や文化、産業、人々の暮らしに触れながら学びを深めることのできる貴重な機会です。本プログラムを通じて地域への理解と愛着を深め、この街で働く人々の思いや可能性を感じていただき、将来、長崎で活躍することや地域に関わり続けることを考えるきっかけになればうれしく思います。



授賞式

受賞者の声

NAGASAKIクエスト賞 (最優秀賞)



牧山 真太朗さん

大学院総合生産科学研究科博士前期課程 1年

プロジェクト名 NAGASAKI ECHO

フォトグラメトリーによる
SNS参加型遺産のデジタルアーカイブ構築提案

NAGASAKIクエストでもっとも印象に残ったのは、軍艦島と軍艦島デジタルミュージアムです。かつて日本の工業の成長を力強く支えた人たちがいたことと、その人たちの生きた証を知ることができました。また、炭鉱作業がいかに過酷で危険と隣り合わせだったか、そしてこのような場所が私の生まれ育った街のすぐそばにある、そんな貴重な事実について改めて実感しました。

私は、ピラミッドなどの世界遺産や巨

大建築物を対象とした、3Dアーカイブ化の研究に取り組んでいます。長崎には原爆の被害を受けた建築物や各種資料、そして軍艦島という世界に誇れる遺産があります。一方、それらの中には劣化や風化が進み、諸行無常を感じさせるものも少なくありません。成果報告会では、このような現状と私自身の研究を生かし、AIを活用して観光地の写真を3Dモデル化するプロジェクトを提案しました。最優秀賞を目指して、自分なりに面白いと思



う案を準備したつもりでしたが、他の参加者の皆さんのレベルが高く、受賞者が発表される時は不安でした。最後に名前を呼ばれた時は、周りの友人も含めて驚きしかありませんでしたが、次第にうれしさが込み上げてきました。

このたびは、大変素晴らしい機会と名誉ある賞をいただきありがとうございます。この貴重な経験を自身の成長や自己研さんだけに終わらせず、周囲の人々や社会に少しでも還元できるよう、これからの活動に生かしていきます。



宮原 瑠生さん

環境科学部 2年

プロジェクト名

ナラティブ・ツーリズム×サステナブルツーリズム
外海・五島の星空と、そこでかつて闇夜の下りそかに信仰を続けた潜伏キリシタン

優秀賞

外海地区の潜伏キリシタンに関する資料館で見た小さな十字架が印象に残りました。無機質なもののはずなのに、弾圧の中でひっそりと信仰を続けた人々の祈りの気持ちが届くようだったからです。また、外海地区を歩いて感じた自然の豊かさから、この地区の魅力を引き出せる発表をしたいと思いました。私は中学生の頃から、県内における光害問題について調査を行い、その解決方法を模索してきました。星空がきれいな外海地区には濃密なストーリーがあります。星空と潜伏キリシタンを融合した、ストーリー性に富んだ観光プランがあれば絶対に面白いとピンとききました。高田明氏が投げかけてくださった「キリシタンの迫害の歴史に触れ、今世界で起きている宗教問題をどう見るか？」という問いに対して、これからも答えを探していきたいと思います。



団体名：コーギーラバー

古本 咲果さん／末永 朱莉さん

医学部医学科 4年

プロジェクト名

Hidden Christian QUEST

―歴史の主人公のPOV動画で体験する潜伏キリシタンの歴史―

優秀賞

今回の提案は、NAGASAKIクエストで潜伏キリシタン関連遺産を巡る中で感じた「遺産の一つ一つの価値は非常に大きいのに、それぞれが持つ物語が十分に伝わりきっていないのではないか」という思いから生まれました。そこで、生成AIを用いた一人称視点、いわゆるPOV動画とスタンプラリーを組み合わせ、観光客が歴史の主人公として、250年の物語をたどることのできる観光アプリ「Hidden Christian QUEST」を提案しました。発表時はとても緊張しましたが、自分自身が現地で感じた感動や問題意識を、できるだけ自分の言葉で伝えたいと思って臨みました。受賞した時は驚きでしたが、長崎の歴史の価値を新しい形で伝えたいという思いを評価していただけたことが、とてもうれしかったです。



団体名：教育学部長崎専攻

尉 龍翔さん／山口 優心さん

教育学部 1年

プロジェクト名

拡大版長崎クエストと循環

優秀賞

長崎大学のキャンパスツアーがとても印象に残りました。医学部にある「解体新書」の初版本や経済学部の「マリア観音像」など、博物館に行かなければ見られないような貴重な資料が多く存在することに驚きました。これから過ごす4年間で、大学所蔵の貴重な資料とずっと巡りたいと思いました。ツアーや発表を通して、改めて長崎には未来をリードする力強い魅力が多くあることを理解しました。国際情勢がより不安定になる中、一人一人が少なからず不安を感じているかもしれません。そんな今だからこそ、多様な文化が楽しく入り交じった厚みのある長崎の歴史こそが、日本、そして世界にとってキーポイントになると強く信じています。将来、教員になる夢をかなえた際には、ふるさとに誇りを持って社会に出ていける生徒を育てていくために、長崎の魅力を生徒たちと共有したいと思います。

Event Introduction



GIVING
CAMPAIGN
2026



詳細はこちら

開催期間／10月16日(金)9:00～10月25日(日)21:00

長崎大学は、学生サークルの活動を応援する「Giving Campaign 2026」(以下GC)に今年も参加します。本キャンペーンは、学生団体の魅力を発信し、投票やSNSでの応援を通じて活動を支援する、全国の大学が参加するイベントです。キャンペーンに向けて、参加団体の情報発信が始まりました。

今年は40を超える団体が出場し、それぞれの取り組みや成果を紹介していきます。長崎大学の学生たちは、全国の大学の学生団体に負けない熱意を持ってキャンペーンに挑みます。

学生たちの挑戦を後押しするため、キャンペーン開始の際にはぜひ温かい支援をお願いいたします。

卒業生イマナニシテル!?

卒業生の思い出や現在の様子を知ることができる「卒業生イマナニシテル!？」が『Web Choho』限定で公開されています。皆さまのお知り合いが登場するかもしれません。また、記事投稿も随時募集しております。ぜひご覧ください。



<https://choho.nagasaki-u.ac.jp/tag/alumni/>

大学への支援はこちらから

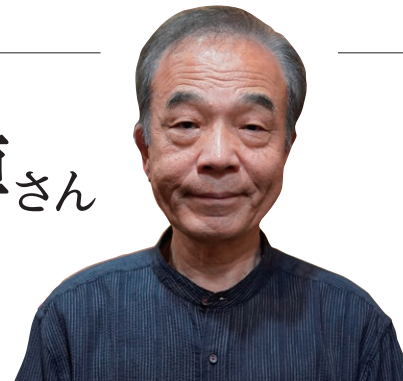
西遊基金



「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、さまざまな問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援と、教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。TEL:095-819-2155



私たちの思い出の場所 ホンダ楽器 本田 喜博さん



音楽系サークルが足しげく通う国道沿いの楽器店

戦後まもない1947年、この地（現在の浜口町）に父が「本田電機商会」を創業しました。その頃、目の前の国道は未舗装の砂利道で、材木を積んだ馬車が行き交っていたそうです。やがてレコードも販売するようになり、私が25歳の頃、いわゆる第一次エレキギターブームが到来。それをきっかけにギターも店頭に並べ始め、「ホンダ楽器」として営業を開始しました。高校生や大学生など、客層は楽器店を始めた頃からさほど変わっていませんが、かつてはキャバレーで演奏していたプロのミュージシャンも利用してくださっていました。



地下に練習用のスタジオが4室、3階にライブスタジオがあります。音響設備もそろっており、オペレーターを長太OBが担当しています。

楽器店を始めた頃の長崎大学には、音楽系の同好会やサークルが複数ありました。楽器を演奏すること自体、まだ珍しかった時代でしたから、メンバーやバンド間のつながりはより深かったのかもしれません。印象に残っている学生団体の一つが、現在の「医歯系軽音楽部」です。長崎大水害後に大きなスタジオを新設した時、当時発足したばかりだった同部の皆さんが、そこを部室代わりに使っていたからです。またコロナ禍には、卒業ライブを実現できないまま卒業した薬学部[※]の学生さんもありました。ギリギリまで準備を進めていたもので、心残りだったのだと思います。卒業から数年を経て、その思いを形にするように、今年8月に当店でライブを実現されました。

楽器店を始めて50年以上になります。時代は変わっても、学生の皆さんとの付き合い方は変わらず、適度な距離感を保ちながら見守るようにしています。一方で、伝統あるサークルの皆さんが同窓会ライブの会場と



1958年頃の様子。当時、銭湯[※]に薪を運ぶ馬車が行き交っており、夜道を照らすための懐中電灯に使用する電池を購入する人が立ち寄ったそうです。

して当店を選んでくださるなど、長い間お世話になっていることがとてもうれしいです。「P.M.C歌おう会」や「RON.Rock部」、「Mild-Beat」など、現役の音楽系サークルの皆さんも、よく利用してくださっています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



建物はビルに建て替えられましたが、場所は創業時から変わっていません。

アンケートのご協力をお願い

以下を明記の上、広報紙Chohoへのご意見・ご感想をお寄せください。

- ①面白かった記事 ②本紙に対するご意見・ご感想
- ③今後取り扱ってほしい内容
- ④長崎大学からの情報発信全般についてのご意見・ご感想
- ⑤本学とご関係 ⑥年齢 ⑦氏名（ふりがな）
- ⑧郵便番号 ⑨住所 ⑩電話番号



◎はがき：〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学広報戦略本部 宛て

◎FAX：095-819-2156 ◎メール：kouhou@ml.nagasaki-u.ac.jp

◎募集期間：2027年1月末まで

読者プレゼント

アンケートにご協力いただいた皆さまの中から、抽選で10名様に、長崎大学オリジナルQUOカード（500円分）をプレゼントします。賞品の発送は2027年2月を予定しています。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



Choho

定期送付サービス
受付中!



広報紙Chohoはその多くを、各学部同窓会様の会報誌送付の際に、直近の号のみ同封してお送りしています。そのため、読者の皆さまには必ずしも毎号お届けできないケースがあり、「定期送付をしてほしい」とのお声をいただいております。定期送付を希望される場合は、上記サイトへアクセスしていただき、ご登録をお願いいたします。皆さまのご利用をお待ちしております。

送付先変更のご連絡はこちらまで



編集後記

長崎の街で暮らしていると、日常の中にさまざまな「音」が聞こえてきます。最近ではスタジアムから溢れ出る歓声も、長崎の新たな音風景の一つではないでしょうか。本号では、そんな「音」にまつわる長崎大学の研究を特集しました。

井上剛教授は、かつて留学先で行ったマウス実験で、薬剤を入れ忘れた状態で超音波を当てたところ、腎臓の状態が改善するという予想外の結果が得られたといいます。そこから生まれた疑問を長年追い続け、現在の研究成果につながっています。

思いがけない偶然が、新たな発見につながる場合があります。疑問と向き合い、試行錯誤を重ねて得られた成果が、やがて私たちの生活や社会を支えていく。そうした探究を重ね、新たな知を社会へつなぐことこそ、大学の大切な役割だと感じました。

「音」は身近な存在でありながら、まだ知られていない可能性が秘められています。本号を通して、そこから広がる研究の世界や、「音」の新たな一面を感じていただければ幸いです。

広報戦略本部 山田 悠貴

長崎大学SNSサイト



X



Facebook



Instagram



YouTube

